

大阪市 中 教 研 会 報

No. 131

編集者 大阪市立中学校教育研究会
発行人 大阪市立中学校教育研究会
会長 石 川 文 子
発行所 大阪市立中学校教育研究会
大阪市立宮原中学校
TEL 6394 - 2455

新たな時代に 求められる教育



大阪市教育委員会事務局

指導部長 水 口 裕 輝

近年、自動運転や顧客電話対応等、AI が様々な商品・サービスの要を担う時代が到来し、現代社会は急速に大きく変わろうとしています。それに伴い、教育分野においても大きな変革期を迎えていると言えます。

文部科学省は、その状況を踏まえ、「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」を発表しています。その中で中学校時代の取り組むべき教育政策の方向性について、常に流行の最先端の知識を追いかけることではなく、学びの基盤を固めることであるとしており、あわせて、経済格差や情報格差等が拡大し弱者を生むことがないよう個別のニーズに丁寧な対応を行い、すべての生徒が Society 5.0 時代に求められる基礎的な力を確実に習得できるようにすることが引き続き重要になるとしています。

先端技術には、教員を支援するツールとして活用することにより質の高い教育を実現できる大きな可能性があります。だからこそ、学校教育の中核を担う教員に学びの精神が強く求められ、今後の新しい社会の姿を見据えるとともに、新しい学習指導要領の理念を理解し、着実に実現することが必要不可欠となります。

そこで、本市では、全国学力・学習状況調査の結果より、「語彙力」、「意味や目的を理解する力」、「事実・情報から分析・考察する力」等が各教科の共通課題と分析し、授業スタンダードである「3つの学び」（「考え、表現する学び」、「話し合う学び」、「めあてを振り返る学び」）をめざした授業づくりや ICT の活用等により学力向上を図っているところです。

各研究部、各中学校におかれてましも、第3期教育振興基本計画および新学習指導要領において求められている学力を踏まえて課題分析し、より一層の授業改善に取り組んでいただきますようお願いいたします。

最後になりましたが、大阪市立中学校教育研究会のますますのご発展を祈念いたしますとともに、本市の生徒たちの学力向上のため、引き続きご尽力賜いますよう、よろしくお願いいたします。

学びの「質」を高めるために



大阪市立中学校教育研究会

会長 石 川 文 子

「新学習指導要領」の告示、「大阪市教育振興基本計画」の改訂を受け、本年度も、昨年度に引き続き「未来を切り拓く力を育む教育の創造 ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～」をテーマに研究活動を進めてまいりました。

各研究部・各ブロックにおかれましては、テーマの実現を目標に、研究を進めていただきましたことに厚くお礼申し上げます。

各ブロックの研究発表会、そして10月10日の全市研究発表会(全市研)で、公開授業や研究発表・研究協議等を行っていただき、大きな成果をあげることができました。特に全市研では、参加者数が300名に達した部や、参加率が90%を超える部もあり、例年と同様に会員の皆様の積極的なご参加をいただきました。いずれの研究部におかれましても熱心な取組から、そのご準備のご苦勞を察することができました。若い先生方の参加率も高く、これからの研究について大いに期待できるところです。また、今年度は自然災害の影響でチャレンジテストが日程変更となり、ブロック研究発表会においては急な対応をしていただき、大変お世話になりました。それぞれの研究部の部長様やブロック委員長様をはじめ専門委員の皆様、大阪市教育委員会・教育センターの皆様、そして何よりもご参加いただきました会員の皆様に心より感謝申し上げます。

さて、社会の構造が変化し、必要とされる知識も急激に変化し続けることが予想される今、学びの基礎固めが大切です。また、学校だけでなく社会全体で義務教育を支える「社会に開かれた教育課程」による学びを進めていくことが必要となります。さらには、その学びの「質」が問われます。その「質」を高めるためにも、各研究部、各ブロック、各学校におかれましては、新学習指導要領の主旨をふまえ、積極的に情報交換をしていただき、取組を進めていただきたく存じます。中教研の取組が、それぞれの研究のかけはしとなり、目標達成の力になるよう邁進してまいりますので、皆様方にはご協力を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、本年度も、各研究部長様・各ブロック委員長様をはじめとする専門委員・会員の皆様方に多大なるご尽力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、ご指導・ご助言を賜りました大阪市教育委員会、大阪市教育センターの皆様方に厚くお礼申し上げます。

部門より研究活動・成果について

国 語 部

「生きる力」としての国語力の育成

－自分の思いや考えを深める言語活動の充実－

原 口 貴美子（勝山中）

研究主題に基づき、日常の教材研究、授業実践、授業研究を伴う校内研修会をとおして個人・グループの研究推進に取り組んだ。また、各ブロックや全市研究発表会等で提案授業の公開、研究報告について協議し合うことにより、指導力の向上を図った。

全市研究発表会の公開授業では、古典「枕草子」の単元目標「自然や人間に対する筆者のものの見方や感じ方を捉えたり、古人の心情を現代の自分たちとの対比の中で読み取ったりすること」に主体的に取り組ませるために、グループで『解説付きオリジナル現代語訳』（『清少納言がやってきた』のシナリオ）を作って発表する」という言語活動を設定した。この言語活動をとおして対話的な学びを実践し、改善に向けた他グループとの交流により、新たな気づきや考えの広がり、深まりなどの「深い学び」につながる工夫を試みた。

また、書写については、「新学習指導要領をふまえた書写指導－多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れる－」というテーマで、小・中学校の学習指導要領の改訂のポイントを説明し実践発表を行った。

さらに、大阪教育大学教授の松山雅子先生の講話「主体的・対話的で深い学びをめざして－語り直す行為への着目－」では、小学校からの義務教育 9 年間の国語教育における主体的・対話的で深い学びについてご講話いただいた。文章と指導者・学習者がどのように内的に対話するのか。ことばを一つの窓口にして、自己内対話する。その振り返りとして、自らを読み手として、また書き手として（表現者として）の深い学び。省察的な思考力を高めるための方法である深い学びをめざす一つの方法として「語り直し」についてご指導いただいた。

これらの研究の取組を継続させて、今後の研究活動のさらなる充実をめざしていく。

社 会 部

自ら学ぶ力を育み、未来を拓く社会科学習

－ひと・もの・ことをつなぐ学習の創造－

鈴木 慶彦（野田中）

- ・研究主題に基づき、教科指導・授業実践・授業検討会等を通して研究活動を行った。
- ・全市研究発表会は、近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会を兼ねて11月22日（木）に開催した。主体的・対話的な学びの活動の中で、問いと資料を活用して学びを深める取り組みについて、基調提案と研究発表および公開授業を行い、研究の成果を近畿の各中学校をはじめ、全国から参加された社会科教員に発信した。
- ・上記大阪大会にむけた実行委員会を通して、大阪府中学校社会科教育研究会・堺市立中学校教育研究会・近畿中学校社会科教育研究会・大阪教育大学附属中学校と連携し、教員の研究・交流・研修を深めた。
- ・全国中学校社会科教育研究大会徳島大会に参加し、次期学習指導要領など今後を見据えた研究実践を社会部で共有した。
- ・大阪市立中学校総合文化祭の一環として、生徒研究発表会（展示部門・舞台発表部門）を実施し、会誌「みおつくし」No.59を発行した。
- ・会誌「社会科通信」を発行し、全校に配信した。

数 学 部

数学的に考える力を育む授業の創造

－課題を自立的、協働的に解決する力の育成に向けて－

坂 恵津子（新豊崎中）

生徒が「なんで？」と疑問を持ち、自ら調べてみたいと感じるような課題はどう設定するのか。より考えを深めたり広げたりできるグループでの話し合いを、数学のねらいの実現にどう繋げればよいのか。ICT機器は、授業のどの場面でどう使うのが効果的なのか。私たちが日々感じているこれらの課題の解決につなげたいと、全市研究発表会では、試行錯誤を繰り返しながら作り上げた4つの授業を発表しました。

また、國學院大学教授の田村 学先生、文教大学教授の永田 潤一郎先生を講師にお招きし、新学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりや、これまで我々が取り組んできた「数学的活動」についてともに考える時間をもちました。

新たな授業づくりについて多くのヒントを得ることができました。

理 科 部

自然の事物・現象についての理解を深め、
科学的な見方や考え方を養う理科教育

吉 本 博 志 (市岡東中)

- ・全市研究発表会では、野田中学校において「対話的・主体的な深い学び」を実現する方法として、タブレット端末を用いての授業や、生徒の興味をひきつける演示実験を行うなど、教材の工夫によって学習意欲を喚起する実践について発表した。
- ・今年度70回目を迎えた生徒理科研究発表会では夏休みの自由研究や科学系部活動の研究成果の展示発表やプレゼンテーションを行い、優秀な作品や発表は大阪市立中学校総合文化祭や大阪府学生科学賞に出展した。
- ・大阪府中学校理科教育研究会発表大会では生徒理科研究発表会の70年の歴史を振り返り、自由研究が子どもたちの深い学びにつながることを発表を行った。
- ・大阪市小学校教育研究会の総合研究発表会に参加するなど、小学校の理科教育との積極的な接続・連携を図った。
- ・全国中学校理科教育研究発表会神戸大会へは11名で参加をし、「青少年のための科学の祭典」「淀川水系水生生物調査会」に参加し、その成果を全市研究発表会で共有した。
- ・理科教員観察実験研修会、理科授業法研修会を実施し、日頃役立つ理科教員として研修の場を提供し教科授業力の向上への支援を行った。
- ・今後、教材や授業法のデータベース化を進めるため、研究部の中で取り組みを立ち上げていくところである。

音 楽 部

『表現と鑑賞 音楽力の向上』

ー 豊かな感性を育て、表現力を培う授業のあり方 ー

中 本 宏 司 (我孫子中)

10月10日(水)に行われた全市研究会音楽部会において、大阪市立阿倍野中学校瀧口弘美教諭による公開授業と大阪市立昭和中学校徳山有紀教諭による研究発表を実施した。

公開授業においては、杉本竜一作詞・作曲の“Forever”を教材に、「曲想や全体の響きを感じ取って、表現を工夫しよう」を目標にタブレット機器を導入した歌唱表現の授業が展開され、音楽科において数年前から研究の柱としてとらえているICT機器の導入した実践に、大変興味深い内容として研究協議において活発な協議が行われた。

また、ICT研究指定校の先進的な実践導入の研究報告を頂き、今後のICT活用のあり方を参加者全員共有できたことは大変意義深い事である。

更に音楽部として年2回実施している研修会の総括として、今年度の冬期研修会で過去3年間実施してきた教科授業におけるICT機器の活用の研修を実施する。

美 術 部

豊かな人間性と創造性を育む教育活動をめざして

藤 田 政 治 (茨 田 中)

この数年、美術部ではA班「美術を通して育てる力」・B班「魅力ある教材(表現)」・C班「魅力のある教材(鑑賞)」・D班「評価の形」の4つのプロジェクトにおいて「アクションプラン」の各班として活動し研究を進めてきました。特に今年度は各プロジェクト間のネットワークを大切に、各班同士の合同研修会を企画・運営することで新しい研究成果を上げることができました。

表現や鑑賞の幅広い活動を通して創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育てる、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力をのびし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養うことを目標に、本年度も全市研究会をはじめ、各ブロックでの研究会や実技研修、生徒作品展(総合文化祭美術展、美術部展・造形展)、アクションプラン研修会を継続的に実施し、各校の美術教育活動の活性化と次世代につながる美術教育の可能性について積極的に研究を重ねていきたいと考えております。

保健体育部

保健体育授業における学習意欲を高める協働的深い学びの創造

ー陸上競技（リレー種目）の指導方法の研究ー

橋 本 寛（董 中）

- ・新学習指導要領に伴い保健体育科の授業づくりにおいても、協働学習を通して深い学びにつながる指導方法の研究を進めている。
 - ・全市研究発表会においては、がんばる先生支援 B グループの選定を受け「陸上競技（リレー種目）の指導方法」について、大阪教育大学准教授 井上功一 先生の指導を賜りながら公開授業・研究協議に向けて研究しました。
- 今年は、今市中学校保健体育科、山川太一教諭が公開授業に向けて、井上准教授の指導を受けながら中教研、保健体育専門委員の先生方にも協力いただき、研究を進めました。
- 公開授業では、全 5 時間の授業計画の中 4 時間目の授業を公開する予定でしたが、残念ながら研究発表会当日は、雨天のため実技授業は中止になりました。事前に取り組んでいた授業の様子をビデオで紹介することにより、公開授業当日の授業のイメージを描いてもらいました。「チームにとって効果的なバトンパスの方法とは何か？」に焦点をあて、話し合い、練習に取り組む過程を大切に指導した授業の流れを確認していただきました。チームのメンバーが、お互いの能力差を認識し、チームの課題を分析、共有することで、同じ目標に向かって練習に取り組む過程に重点をおいた評価目標を掲げ、評価と指導の一体化を目指した授業実践を行いました。
- ・指導者向けの伝達講習会として、5 月末に高知県で行われた西日本指導力向上研修会に参加した董中学校 小林龍平教諭と梅香中学校の黒部 優教諭から「体づくり運動」と「保健学習の進め方」についての伝達講習会を行いました。参加した多くの先生方は、各校ですぐに役立つ実技指導として活用できる内容として、熱心に研修に取り組んでおられました。
 - ・大阪教育大学 准教授の井上功一先生から「評価と指導の一体化」についての講演があり、生徒を評価することによって、指導する上での課題を見出すことができ、指導者側の授業力を見つめ直す機会となること、1 時間の授業で多くの評価規準を設定することで、授業での指導が中途半端になることのデメリットについての説明がありました。
 - ・参加された先生方のアンケート結果からは「リレーの専門的な指導内容がよく理解できた」「評価と指導の在り方について、新たな気づきがあった」等、多くの先生方が研修内容を自校へ持ち帰り、早速実践したいと回答されました。

技術・家庭部

『豊かな生活を創造する力を育む技術・家庭科教育』

ー主体的な学びによる課題解決学習ー

宮 脇 敬 市（東三国中）

- ・全市研究発表会を大阪市立八阪中学校で実施し、技術分野の公開授業『C 生物育成に関する技術』、家庭分野の研究発表『B 食生活と自立』を行った。
- ・第57回近畿地区技術・家庭科研究大会（滋賀大会）での家庭分野研究発表『B 食生活と自立』や参加を通じて研修を深めた。
- ・第18回創造アイデアロボットコンテスト大阪府中学生大会兼近畿大会を開催した。
- ・大阪市立中学校総合文化祭、全国中学生創造ものづくり教育フェアに参加した。

英 語 部

英語で積極的にコミュニケーションを図る資質・能力を育成する

ー 5 領域のコミュニケーション能力を総合的に養うー

井戸本 崇 志（我孫子南中）

全市研究発表会において、大和川中学校の教員が、ホワイトボード・CD・デジタルテキスト・ピクチャーカードを効果的に用いると同時に、机の配置にも工夫がされた授業を、オール・イングリッシュで行った。また、20 分間の帯活動では、生徒たちが即興で与えられたトピック、日常挨拶、mind map 等を参考にした 1 分間スピーチを、10ルールを意識しながら主体的に発表した。

公開授業後、文教大学の阿野 幸一教授をお招きして、「コミュニケーションのための英文法指導」と題してご講演を頂いた。子どもたちの英語学習への興味・関心を高め、学習意欲を喚起する英語教育を、ますます推進する必要性を感じた貴重な講演であった。

道 徳 部

人間としての生き方についての自覚を深める道德教育の創造

－豊かな心を育む道德の授業づくりをめざして－
 (道德授業の指導方法と評価に関する研究を深める)

安 藤 幸 人 (東 陽 中)

- ・ 道德の授業（年間35時間）を計画的に実施できるように大阪市教育局・大阪市教育局センターと連携して、研修を深める。
- ・ 道德教育推進委員会を中心に全市130校における道德教育の深化・充実を図る手立てを提示する。
- ・ 事務局体制を整備し組織づくりを進めるとともに、全市研究発表大会等の充実を図る。
- ・ 全市研究発表会 10月10日 (水) 大阪市立井高野中学校
 授業者： 村田 裕司 先生 資料名： ふたりの子供たちへ
- ・ 道德部主催で 道德の土曜学習会【6回実施】
- ・ 大阪市教育局センター主催（5年次）研修に授業者として8名の教諭が模擬授業を行う。
- ・ 道德教育推進委員会【4回実施】
- ・ 文部科学省「道德教育の抜本的改善・充実にかかる支援事業」10校の拠点校で公開授業
 平成31年度「特別の教科 道德」の教科化実施にむけて、各校が読み物資料等を通して、授業づくりを進めている。35時間を学習指導要領に沿って、各校が実施できるようにと、さらに道德の授業づくりを推進していく。

特別活動部

生徒一人ひとりが主体的に生きる特別活動の創造

－これからのキャリア教育－

進 藤 文 代 (旭 陽 中)

特別活動部では「生徒会活動を中心とする特別活動」と「キャリア教育をはじめとする進路指導」の二本柱で取り組みを推進してきた。

全市研究発表会では、前半はキャリア教育で神戸女子大学キャリアサポートセンター長岡田様に「就職活動の現状と大学における支援内容について」ご講演していただき、「今」の就職活動の動向を詳しくお話しいただいた。中学生にどのような力をつけさせることが大切であるかを考えるよい機会となった。続いての、キャリア教育報告「第67回進路指導・キャリア教育研究協議会全国大会の参加報告」では①大阪市として、全国初の公設民営による併設型中高一貫教育校である大阪市立水都国際中学校・高等学校の開設について発表したこと。②超スマート社会【society5.0】という新たな時代において豊かに生き、活躍するためには、学校が、これまでの一斉授業のみならず「主体的・対話的で深い学び」の実現や、キャリア教育の視点を持ち、「意図的・計画的」に取り組むことが必要であることが報告された。

後半は、生徒会活動に関して「生徒会活動実態調査分析結果について」大阪市立大学大学院文学研究科人間行動学専攻教育学専修後期博士課程小原淳一様に報告をしていただいた。生徒会活動は形だけのものになっているのではないかと、生徒の自主活動になっているのかなど、鋭い指摘をいただいた。活発な意見交換が行われ、生徒とともにこれからの活動を再考することが必要であると感じる有意義な質疑応答となった。

生活指導部

生活指導上の今日的な課題を把握し、地域・関係機関と

連携・協働した効果的かつ組織的な生活指導體制を研究する

源 嶋 史 展 (高 倉 中)

- ・ 発表・講演の概要

研究発表 「アンケート調査の結果から」

～児童虐待と問題行動の平成26年度との比較～

大阪市立瑞光中学校 教諭 羽 原 義 章

問題行動に関するアンケート調査結果について、平成26年度と今年度の比較検証を行った。その比較検証から、「問題行動発生」に関しては概ね減少傾向にある。しかし「問題行動種別」ごとに見ると、「いじめ」「生徒間暴力」については、平成26年度より増加傾向にあり、「情報機器課題」や「対教師暴力」については

減少しているが、依然として注意する必要がある。問題行動発生の「未然防止」をはじめとした様々な課題に対して組織的な生活指導体制を構築していくことが重要である。

児童虐待について、「通告は義務であること」、そして我々教職員が「虐待を発見しやすい」立場にあることを自覚して、指導・対応に当たらねばならないと認識を新たにした。通告して終わりではなく、児童生徒の安心・安全を確保するために、できること・すべきことをしていかなければならないと報告した。

講演1 「大阪府警察における児童虐待対策の取り組みについて」

大阪府警察本部生活安全部少年課 児童虐待対策室 警部 森 島 正 木 様

児童虐待について、平成29年度の大阪府警察本部における認知件数とそこから分かったこと、また認知をしたら必ず通告し、児童相談所につなぐまでの流れについてご講演いただいた。児童虐待防止のために警察が担うのは早期発見であることから、110番通報等で「虐待を受けたと思われる」場合、うもれさせずに必ず児童相談所につないでいるとのことであった。大阪府警察本部の児童虐待対策室においては、独自のアセスメントツールを作成し、活用しているとのことであった。児童虐待の防止について、昨年度の中教研生指部研究発表で報告があったアセスメントシートの活用をはじめとして、「児童生徒の安全を確保するために」我々ができること、しなければならぬことを考えさせられたご講演であった。

講演2 「少年非行の現状や被害防止について」

大阪府警察本部生活安全部少年課 少年育成室 警部 森 崎 英 志 様

最近、中高生の「大麻」による事件発生が増加している。「大麻」は「①依存性が強く、身体への危険性が著しいこと、②法律で厳しく罰せられる厳格な罪であること、③自身を含めた身内に不幸を及ぼすこと」を改めて認識させられた。児童生徒の安心・安全を確保するために、「大麻」を含めた薬物に関して、これまで以上に考えていかなければならないと感じさせられたご講演であった。

・研究の成果と今後の課題

「児童虐待」という喫緊の課題について、まずは我々教職員が、子どもや保護者の言動や状況から「何かおかしい」と感じるができる感性を磨かねばならない。そのことが事態の深刻化を防ぐ鍵である。教育と福祉の双方が児童生徒の安全を確保するためにできることを考え、そして行動にうつさねばならない。

特別支援教育部

子どもたち一人一人が、共に学びに向かい 生きる力を育む教育をめざして 柿 花 正 信 (梅 南 中)

研究活動について

「子どもたち一人一人が、共に学びに向かい 生きる力を育む教育をめざして」を研究主題に、新しい時代に対応する特別支援教育を目指し各ブロック研究会、全市研に取り組んだ。また、近特連京都府大会に参加し近畿他府県市と実践交流を行った。今年度は全特連発達障害夏期セミナー大阪会場の開催に協力し、現地事務局としても多くの教員がその準備と運営に携わり、今後の研究大会等開催の為の経験やノウハウを得ることができた。そして全国から来阪する参加者と交流し、研修を深めた。

がんばる先生支援事業を受け、「インクルーシブ・フレッシュ研修会」を11回実施して継承研修、継続研修を実施した。また、年度末研修報告会を開催し、研究活動を積み重ねるとともに、全市的な1年間の取組の総括を行った。これらの成果については機関誌「特別支援教育」を発行し、情報提供を行った。

交流行事について

合同うんどう会、ふれあいステイ、ふれあいデイキャンプ、生徒さくひん展、卒業生を励ます会を大阪市中学校特別支援教育担任者会と協力して実施し、全市的な生徒及び教職員の交流を進めた。

そ の 他

小中連携会議や幼・小・中・旧市立特別支援学校の校園長連絡協議会を実施することによりきめ細やかで切れ目のない連携を行うことができた。

保健養護部

養護教諭の専門性と資質の向上をめざして

吉 田 直 子 (新豊崎中)

- ・研究主題に基づき、各ブロックにおいて共同研究を進めている。今年度の全市研究発表会では、「ヒヤリハット事例から学ぶ救急対応」をテーマに事例研究を実施。大阪市立中学校において、実際にあった救急対応の事例 3 題（食物アレルギー、意識消失、髄膜腫）について、グループワークを行い、見立て（傷病の可能性）や救急対応を検討。その後、関西医科大学救急医学講座 鎌方安行教授より各症状の進行や、症状の発生根拠等について指導助言と「救急傷病への初期対応」をテーマにご講演いただいた。参加型の事例研究となり、大変有意義なものとなった。
- ・学習会（「心の危機的状況への取り組みと子どもたちへの支援方法」「ネット・スマホ依存症について」）、スキルアップ研修会（「ピアサポートを取り入れた学校保健活動」）を実施し、成果を得ている。

情報技術部

多様化する情報を活用する力を身につける

箕 輪 正 秀 (相生中)

A I（人工知能）やビッグデータ等の情報関連分野の高度化により、情報化・グローバル化が急激に進み、将来の変化を予測することが極めて困難な時代を迎えている。そこで、多様化する情報を活用し、次代を生き抜く人材を育てるため、これまでの研究成果をふまえながら、新たな研究を進めてきた。生徒の実態把握に努めながら、情報・新聞・統計の 3 部門において、指導方法の工夫・改善について授業実践と研究協議を重ねている。全市研究発表会は、関係諸機関の方々の多大なご支援により、参加いただいた先生方にこれからの指導の充実につながる内容を提案することができた。情報技術部門からは、協働的・相互的な学習を基本にタブレットの様々な活用例について実践事例を発表した。新聞教育部門からは、新聞記者の方による「新聞読み方講座」と元大学講師の方からは新聞を使った授業展開をワークショップ形式で行った。統計教育部門からは大阪府統計指導者講習会の受講を受けた伝達講習を行い、ビッグデータの読み解き方や活用例について、身近な具体例を示しながら説明を行い、教育効果をより一層高める教育実践を考える機会とすることができた。

教育メディア部

「生きる力」と「感動する心」を育む教育メディアの研究

— 学校図書館・放送・視聴覚教育を通して —

原 稔 (淡路中)

- 研究主題に基づいて、学校図書館教育・放送・視聴覚教育の部門に分かれて研究活動を行った。
- ・学校図書館教育部門では、各中学校の学校図書館担当者を中心に、学校図書館を活用した調べ学習や読書活動の活性化を図るとともに、大阪市学校図書館協議会と連携し、大阪市青少年読書感想文コンクール・大阪市読書感想画コンクールに取り組んだ。
- ・放送・視聴覚教育部門では、近畿放送教育研究協議会および近畿視聴覚教育連盟と連携し、NHK 杯全国中学校放送コンテスト大阪大会、大阪市立中学校放送コンテスト新人大会に取り組んだ。
- ・全市研究発表会では、大阪大学大学院の池内祥見助教に「人を通して本を知る、本を通して人を知る。～ビブリオバトルの導入から実践まで～」のご講演をいただき、講演の後、1 グループ 5 ～ 6 人に分かれて、参加者全員でビブリオバトルを行った。

教育課題部

未来を切り拓く力をはぐくむ教育課程の編成

安 村 哲 治 (旭東中)

研究主題のもと、全市研究発表会において、丹松美代志先生から「主体的・対話的で深い学びを目指した授業づくり」と題して講演をいただきました。平成33年度からの新中学校学習指導要領に基づく教育課程の全面实施に向け、その背景についてご説明いただき、「主体的・対話的で深い学び」の導入の視点や具体策について、わかりやすくお話をいただきました。

研究発表として、新箕中学校より「タテ持ち型編成を通じた教師力の向上と 21 世紀型スキルの育成」についての発表をおこなっていただきました。講演、発表ともに参加者から多くの質疑等があり、今後の教育活動に向けての有意義な発表会となった。

総合教務必携、学級日誌の検討と発注をおこなった。

ブロックより研究活動・成果について

第1ブロック

カリキュラム・マネジメントの充実をめざして

～新学習指導要領を見すえ、社会に開かれた教育課程の確立～

渡 部 公 伸 (梅 香 中)

第1ブロックでは、5月21日(月)に、梅香中学校において委員総会を開催し、研究主題や事業計画、予算案の審議を行い決定した。今年度の研究主題は、「カリキュラム・マネジメントの充実をめざして～新学習指導要領を見すえ、社会に開かれた教育課程の確立～」とした。このテーマに基づき、各教科ならびに領域部門ごとに研究主題を設定し、研究授業や教材研究、実践等を行うことにした。研究の成果に関しては、8月28日(火)を基準日として「第1ブロック発表会」を開催し、協議を深めることができた。今後の各校の取り組みの参考となる内容となった。

第2ブロック

未来を切り拓く力をはぐくむ教育の創造

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

泉 野 泰 久 (友 測 中)

子どもたちに、「人とつながり、社会に関わっていく力」を育てていきたい。そこで、ブロックの研究主題を表題のようにした。この研究主題に沿って、各部門で事業計画を立て研究活動を行った。

今年度のブロック一斉発表会は、8月30日に12部門において行った。今年度は領域を中心とした年度であったが、8部門の領域に加えて4部門の教科においても発表があった。「学び続ける」教員として、当日どの部門にも多数の教員が参加し、研究協議を行うことができた。このような機会を契機にして、一層、私たちの学びを深め広げていきたい。

第3ブロック

「確かな学力の定着と豊かな心を育む教育の充実」

名 田 正 廣 (港 中)

30年度、本ブロックは主に8月29日(水)に研究発表会を開催。「領域を中心」とした発表年度であったが、全教科を含む、実質18部門のうち(名目上は17部門であるが技術/家庭は別発表につき18部門とした)15部門が研究発表会を開催した。

研究発表の内訳は以下の通り。①報告・研究協議中心ー8部門 ②講演中心ー4部門 ③研究授業中心ー3部門 それぞれの部門において創意工夫されたレベルの高い研究発表が行われた。

発表の傾向においては、「ICT関連」や「主体的・対話的で深い学び」をテーマにあつかったもの。また国語科においては図書をプレゼンテーションする「ビブリオ・バトル」について。また英語部においてはNHKラジオ英会話の講師を招へいして全国的な英語指導の流れをつかむなど、流行に則った取り組みが随所に見られた。

総括としては、近隣の学校による熱心な教職員の研究姿勢から大阪市全体の発表会である全市研究発表会より少人数で、密度の濃いブロック単位の研究活動を今後はさらに活性化させる必要があると強く感じた。

第4ブロック

「安全な社会で心豊かに力強く生き抜く力を育む教育の創造」

森 健 (十 三 中)

- ・大阪市教育振興基本計画の趣旨に基づき、安全で安心できる環境で心豊かに力強く生きる生徒の育成をめざして研究を進めた。
- ・ブロック研究主題をもとにして、9月3日(月)を基準日にブロック研究発表会を実施し、各部門ごとに調査・研究活動を推進した。

- ・研究発表会においては、I C T機器を用いた研究授業、研究協議の他、施設見学、実技講習会、ワークショップ等のさまざまな形態を工夫して実施した。これにより、学習指導要領の改訂を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」を具体化するよう努めた。

第5ブロック**基礎・基本の確かな定着を図り、
個性を生かした「生きる力」を育む教育活動の推進****川 田 浩 二** (東生野中)

本年度第5ブロックでは、研究主題を昨年に引き続き、「基礎・基本の確かな定着を図り、個性を生かした「生きる力」を育む教育活動の推進」と設定した。また、発表は教科と領域を毎年交互に行っており、今年は全教科部門と4領域（特別活動・生活指導・特別支援教育・保健養護）で9月5日（水）に公開授業（研究協議）及び研修を実施した。しかし、台風の影響で特別活動と生活指導の合同開催である生徒会交流会は後日実施となった。

各会場において、各専門委員の先生方が中心となり、研究授業・研究討議・生徒会交流会・ワークショップ等様々な研修が実施され、たくさんの会員の皆様にご参加いただき、相互研鑽の場としていただいた。今後さらに各種研修会等で研鑽を積み、日々の学校での実践に生かされるようお願いいたします。

第6ブロック**生徒の個性を生かし、
主体的に学ぶ意欲を育てる教育活動の研究と推進****山 本 哲 哉** (中野中)

- ・研究主題を受け、各教科・部門ごとに主題に即した研究活動・調査を進めた。
- ・8月30日（木）にブロック一斉研究発表会を開催した。今年度は教科部門中心に研究授業・研究協議等を実施したが、特別活動・特別支援教育・保健養護の3領域部門でも研究協議等を実施した。今後さらに、工夫を重ね、主体的に学ぶ意欲を育てていきたい。

第7ブロック**豊かな心を育み、個に応じた、
学ぶ意欲を高める教育活動を創造する****吉 岡 美由紀** (今宮中)

- ・本ブロックの研究主題を元に、各部門の特性に応じた研究主題を設定し、事業計画にそって、調査・研究を進めた。
- ・8月30日（木）を基準日にブロック一斉研究発表会を実施し、公開授業・研究協議・研究発表・実践報告・交流会・講演会・実技研修・施設見学会と、それぞれの部門で創意工夫された研究発表会が行われた。今後の各校の取り組みの参考になる内容となった。

第8ブロック**豊かな心と未来を切り拓く力をはぐくむ教育の創造****向 井 秀 俊** (木津中)

5月24日に木津中学校において第8ブロック委員全体会を開催し、昨年度に引き続き研究主題を「豊かな心と未来を切り拓く力をはぐくむ教育の創造」と設定した。この研究主題に基づき、各研究部門別研究主題を設定するとともに、8月30日を中心に14部門において第8ブロック研究発表会を実施した。

来年度から教科化される道徳への関心は高く、校内研修に位置づける学校もあり道徳部は日程を変更した。公開授業・研究協議を松虫中学校において行い、100名を超える多数の参加があった。

また、特別活動部では、全ての学校の生徒会役員が昭和中学校に集まり、いじめ防止について活発に意見交換を行った。

今年度も会員の皆さまの協力により、各部門とも工夫した有意義な研究が行われたことに感謝申しあげる。

平成30年度 大阪市立中学校教育研究会 評議員会記録

第 5 回 評議員会

平成30年11月 22日(木) 14:30～

於:大阪市教育センター

- (1) 全市研究発表会について
- (2) 研修計画について
- (3) 研究集録『研究の歩み』について
- (4) 小中一貫教育委員会について
- (5) その他
 - ① 平成31年度の予定について
 - ② 会計事務連絡について
 - ③ 連絡事項

第 6 回 評議員会

平成31年 1 月 25日(金) 15:00～

於:アウィーナ大阪

- (1) 本年度のまとめ
- (2) 本年度会計について
- (3) その他
 - ① 来年度の日程について
 - ② 中教研会報について
 - ③ ホームページについて
 - ④ 本部役員選考委員会について
 - ⑤ 中教研組織改選等について
 - ⑥ その他
 - ・小教研総会等への参加について

平成31年度、大阪市立中学校教育研究会 組織改選について (予定)

目 程	内 容	目 程	内 容
3月 下 旬	○書記より各校に、「部門別会員名簿作成依頼」を送付	5月 上 旬	○各部門の部長は、部長、副部長、会計、小中連携担当、ICT、HP担当及び専門委員の選出を行う。⇒書記に送付 (副部長は2～3名程度、専門委員は各ブロックに3名程度)
4月 8 日(月)	○各学校において「部門別会員」を確認		
4月17日(水)	○各学校より部門別会員名簿を書記に提出 ○本部役員選考委員会による本部役員の選考	5月 中 旬 5月 下 旬	①各ブロックにおいて委員総会を開催し、ブロック委員長、副委員長、会計、専門委員の選出を行う。⇒書記に送付 ※ブロック委員長と部長は原則兼ねない。 ※専門委員の選出の際は、各部長との調整を行う。 ②ブロックの研究主題を検討・決定する。⇒書記に送付
4月19日(金)	○本部役員の指名、全体会の案内状を送付	5月21日(火)	○中学校教育研究会全体会 ※本部役員の選出 ○各研究部 ・専門委員及び部長、副部長、会計、小中連携担当、ICT、HP担当を選出する。⇒書記に送付 ・研究主題等を決定する。⇒書記に送付
4月19日(金) 4月25日(木)	○書記より、各学校の部門別会員名簿を17部門の部長に送付		
4月 中 旬 4月 下 旬	○各ブロック委員長より各部門担当校長名簿⇒書記に送付 ○書記が各部長に各ブロックの担当校長名を連絡 ○各部長とブロック担当校長とで専門委員の調整	6月 中 旬	○各ブロック ブロックの教科・領域担当校長と各部長とで連携し、ブロック内の専門委員の追加・訂正を行う。

※表中の提出・送付となっているところは、Skip による送受信で行う予定。

平成 31 年度の日程

中教研全体会 … 5月21日 (火)

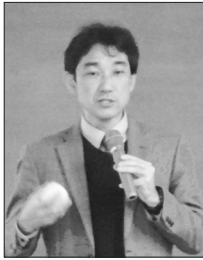
全市研究発表会 … 10月 9 日 (水)

全体研修会 … 11月14日 (木)

平成30年度 大阪市中学校教育研究会・全体研修会

平成 30 年 11 月 22 日 (木)

於：大阪市教育センター



兵庫教育大学大学院 教育施策リーダーコース

諏訪英広准教授より

『チーム学校』で子どもの資質
・能力を伸ばす

今日の話が目新しいものかどうかといえば、そうではありません。日々、感じていることや考えていることを改めて、外部の者と一緒にリフレクトしてみるという機会にしてください。教職員に仕事を任せることなく、すべて自分で片づけてしまう管理職の先生もおられるかもしれません。

さて、サッカー日本代表の森保一監督の言葉を借りますと、自身は、「カリスマ的な存在としてのリーダーシップ」を発揮するタイプではない。いわゆる「分散型リーダーシップ」であると言っています。つまり、**任せて育てて支援するタイプ**だということです。大阪体育大学ラグビー部の中谷監督も、選手としての活躍よりものコーチングやマネジメントで才能を発揮しています。彼も**フォローアップをすることを大切にしている**ということです。

8 年ほど前から、6 年間運営に携わった学校の校長先生が、自校の教員向けに「3S」というシンボルを掲げていたことを紹介します。「Smile・Speed・Seijitu」。先生方の仕事をするときのマインド、他者と関わるときの姿勢を表したものです。先生方も自校の教員向けに、そのようなわかりやすい目標を持たれていますか。その学校には、校舎の入り口や廊下など、多くの場所に「3S」が掲示されていました。今でも鮮明に覚えています。目標を視覚化しているのです。目標達成には効果的な方策の一つだと思います。学校は、生徒も先生も、**そこに関わるすべての人の自己肯定感を支える場**でなくてはなりません。そこで、**学校が組織として機能することが求められる**わけです。

では、「学校」とはどういう場であるかを確認してみます。「子どもの育ちの場」・「教職員の学びと育ちの場」・「大人（保護者・地域住民）の学びと育ちの場」・「地域づくりの核」です。つまり、多様な人の学び・育ち・ネットワークの創出をしているところ、「連携・協調・組織・チーム」が実践されるところが「学校」という「場」です。改めて確認しておきましょう。

この研修のねらいは、「チーム学校」としてのあり方についての基本的な考え方や実現するための方策や留意するポイントについて、リフレクション（省察的視座）を持ち、理解を深めることにあります。ここで質問です。先生方お一人お一人が考えている「チーム学校」とは、どのような「学校」ですか。また、先生方が勤務されている学校は、「チーム学校」になっていますか。さらに、「チーム学校」になっていると考える要因、なっていないと考える要因は何ですか。「チーム学校」となるために、先生方自身は、どのような手を打っていますか。加えて、管理職の先生方は自校の教職員を含めて、そして教諭の先生方は自校の管理職のことも含めて、考えてみてください。

「チーム学校」のイメージは、「①校長のリーダーシップのもと、②カリキュラム、日々の教育活動、学校の資源が一体化にマネジメントされ、③教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして、能力を発揮し、相互に連携・協働し、④子どもたちに必要な資質・能力を確実に身に付けさせることができる学校」です。

このような研修会で、先生方が自校の問題を語ることは難しいのですが、「チーム学校」にするための具体的な方策を一緒に考えていきましょう。

例えば、まず、文科省 HP に掲載されている「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）の概要」を資料として先生方に配付し、イメージを持たせることが大切だと思います。「チーム学校」の教職員や専門スタッフについての知識や参画状況について把握することや可能性を探る手立てになるでしょう。はじめに話した従来型の「カリスマ的リーダーシップ」を発揮する校長がトップにいる学校やフォローアップを充実させた「分散型リーダーシップ」を発揮する「チーム学校」像のイメージ図も掲載されています。このような資料を用いて、まず「チーム学校」のイメージを作っていきます。

次に、学校経営の基本を振り返って、「チーム学校」の在り方の基盤をどこに求めるかを考えていきます。学校経営とは、学校教育の目的や課題を達成していくために、人的・物的・財的・運営的な、その活動の展開に不可欠な諸条件を整備して、学校のもつ組織的機能を総合的・有機的に高めていく継続的な活動です。校長は、可能な限り、「先生方が創造性を発揮する余裕」を作り出すことが重要です。自校は、「共通の目的が設定されているか」「協働意欲は高まっているか」「コミュニケーションは円滑か」という組織の成立要件を満たしていますか。

この研修の場には、校長先生だけでなく、ミドルリーダーも参加していると思います。そこで「チーム学校」を代表する校長のチェックポイントと「チーム学校」を支えるミドルリーダーのチェックポイントを確認します。

校 長

学校のグランドデザイン（自分たちの依拠すべき前提）を語り、語り続けられるか、です。チェックする観点は次の 5 つです。①グランドデザインの提示と共有、②意思形成システムの現状分析と課題発見、③意思形成に向けた会議運営、④ 意思形成に向けられたリーダーシップの発揮、⑤意思形成システムと学校組織の活性化

ミドルリーダー

期待されること（組織の問題現状を「感じ、気づく」こと、管理職と教職員を「つなぐ」こと、分掌や学年を「たばねる」こと、その活動と自己のリーダーシップを「振り返る」こと、組織全体のなかで「分かち合う」こと）

チェックする観点は次の 5 つです。①学校組織の現状分析「感じ、気づく」、②学校のビジョン実現への役割認識「つなぐ」、③リーダーシップの発揮「たばねる」、④キーパーソンとしての役割遂行「振り返る」、⑤学校組織の活性化「分かち合う」です。

（広島大学 林孝氏）

「チーム学校」を目指して実践してきた山口県宇部市にある K 中学校は、教職員全員で学校評価を行っています。また学校の回りには、学校目標の「幟」が立てられています。はじめに話したように、学校は、そこに関わるすべての人の自己肯定感を支える場でなくてはなりません。つまり、学校の関わる生徒や保護者、地域住民に「チーム学校」の一員であることを常に意識させることが、「チーム学校」への成功の鍵といっても過言ではありません。最後に、「チーム化」への 10 の極意を紹介し、研修のまとめとします。

- | | |
|------------------|----------------------|
| ① チームを作るには順番がある。 | ② チームになることのメリットを伝える。 |
| ③ みんなに参加してもらう。 | ④ 現状を伝え、協働意識を育てる。 |
| ⑤ 選択肢をもうける。 | ⑥ 一緒にやる。 |
| ⑦ 相手を尊重する。 | ⑧ 仕事を振り分ける。 |
| ⑨ 仕事をローテーション化する。 | ⑩ 促し方で、誰もが動く。 |

（片山編 2017）